

夢のつばさプロジェクト 2023年度 事業報告書

2023年4月1日～2024年3月31日

新型コロナウイルス感染症の流行によって、直接集ったり宿泊したりする行事は、ほぼ3年間実施することができず、オンラインや手紙のやりとりに頼った活動を続けてきたが、2023年度は、夏のキャンプ（8月5～7日）、秋の交流会（10月15日）、クリスマスキャンプ（12月23～25日）、春の交流会（2024年3月17日）を開催することができた。子どもたちや学生たちも有意義な時を過ごし、ようやく「夢のつばさ」らしい活動が戻ってきたと感じている。

1. 2023年度の学生ボランティア体制とイベント

夢のつばさは2023年度、学生スタッフとして、新入の12名を迎えた。東北大学と桜美林大学の学生が学生ボランティア正副代表を務め、20名余の学生が中心となって活動を行った。活動が数年間制限されてきたために、様々なノウハウの引継ぎが滞ったことが心配されたが、かつて代表などを務めて多くの経験を重ねたOBOG複数名が手厚くサポートし、補う体制がとられている。また、2024年度は正副学生代表、学生会計・企画などをお茶の水女子大学生が担当することが決定した。

夏キャンプ	2023.8.5～7 於：青梅市 子ども15名 学生・OGOBスタッフ41名(入れ替わりを含む) 社会人スタッフ／協力者12名 (入れ替わりを含む) 合計68名	<p>待ちわびた宿泊行事再開で、子どもたち15名と入れ替わりを含む学生・OGOBスタッフ41名、社会人スタッフ／協力者12名(合計68名)が(株)ブリヂストン保養所 奥多摩園に集まった。</p> <p>活動の中心となる学生たちは、誰もキャンプの経験がなく、1年生のスタッフは、「子どもたちの顔を見るのも初めて」となるため、ゆっくり子どもたちと親しむことを主体としてスケジュールが組まれた。</p> <p>1日目は開会式、アイスブレイク、自由時間(おしゃべりタイム)、2日目はすごろくトーク、勉強時間、音楽会、3日目は閉会式(スライドショー、寄せ書き)、上野駅お土産購入などの内容で行われた。</p> <p>アイスブレイクでは、時間内に同じグループの仲間との共通点を見つけ出すゲームを行った。見つけた共通点を会話の呼び水として、久しぶりに会う子どもたちとスタッフ、新しく参加したスタッフも含めて緊張が解ける良いきっかけとなっていた。</p> <p>すごろくトークでは、会えなかった3年間にどんなことがあったかを話す設問やこれからの希望を答える内容を置き、学生スタッフは子どもたちのこれまでのこと、今、頑張っていることや未来について考えていることなどをいろいろ引き出していた。</p> <p>音楽会では、浅野衣美さん(ピアノ)、海老原一晃さん(オーボエ)、興津諒さん(ファゴット)が素晴らしい演奏を聴かせてくださった。楽曲の背景や楽器の紹介もあり、参加者はみな、大変興味をひかれた様子であった。</p> <p>閉会式では、3日間の写真をまとめたスライドショーを楽しんだ後に、子どもたち同士でメッセージを書く時間を設けた。時間が過ぎて</p>
-------	--	--

		<p>もメッセージを書き続ける子や、スタッフに対してもメッセージを書く子の姿が見られ、こうした子どもたち同士のつながりや、スタッフと子どもたちとのつながりが、子どもたちにとって、大切なものとなっていることを感じた。</p>
秋の交流会	<p>2023.10.15 13時～16時 於：仙台市</p> <p>子ども15名、 学生・OGOBスタッフ16名、 社会人スタッフ2名 合計 33名</p>	<p>仙台市市民会館にて秋の交流会・保護者懇談会を行った。子ども15名、学生・OGOBスタッフ16名、社会人スタッフ2名が参加した。久しぶりに参加した子どももあり、学生スタッフは、「打ち解けること、コミュニケーションを活発にすること」を目標に、記憶力ゲームや謎解きゲームを行った。協力して挑み、全員に笑顔があふれる様子に、学生スタッフは「子どものために用意したゲームではあったが、学生たち自身も喜びを得た」という感想を述べていた。</p> <p>懇談会には保護者（母親）2名が参加し、「高校生になった子どもたちが母親に口を開かず、なかなか話ができない」という悩みを話された。参加社会人スタッフ（2名）の中に心理士の板生郁衣さんがおられ、お話を傾聴し「無理に踏み込まず、明るい声かけを続けるなど、受け入れる姿勢を見せて待ってみては」とアドバイスされた。学生／OGOBスタッフ各1名も参加し、「夢のつばさの活動から戻ってきたときに、持って帰ってくる報告書を楽しみにしている」という母親の声に、「子どもが夢のつばさで見せている姿をお伝えすることも、母親にとってうれしいこと」を実感した様子であった。</p>
冬のクリスマスキャンプ	<p>2023.12.23～ 25 於：青梅市</p> <p>子ども14名、 学生・OGOBスタッフ30名（入れ替わりを含む）、 社会人スタッフ12名（入れ替わりを含む） 合計 56名</p>	<p>直前にインフルエンザなどによる体調不良の不参加者が数名出たが、（株）ブリヂストン保養所「奥多摩園」にて、待望のクリスマスキャンプが開催され、大変楽しい時を過ごすことができた。参加した子どもたちは14名、学生・OGOBスタッフ30名（入れ替わりを含む）、社会人スタッフ12名（合計56名）であった。</p> <p>1日目は開会式、手作りでゲームを作ってみようという企画、自由時間（おしゃべりタイム）、勉強時間などをとり、2日目は、「手作りゲームで遊ぼう」企画、自由時間／勉強時間、クリスマス音楽会、3日目は、閉会式、居室掃除、上野駅お土産購入などの内容で行われた。2日目の夜に発熱した子どもが出たため、社会人スタッフ・看護師によって、夜間診療受診の対応をとった。インフルエンザであったが、他に感染者もなく、全員が無事に帰宅できた。</p> <p>今回は、高校・大学受験が近づいた子どもの参加もあったため、学生たちは希望者に個人的な学習指導も行った。苦手な科目を学ぶ子どもや、東京の大学を受験したいという相談に個別に対応する学生もあって、自由時間も目いっぱい使って、勉強に取り組む姿が見られた。</p> <p>毎回、宿舎として使用させていただいている奥多摩園スタッフの方々には、温かいご対応に心より感謝申し上げている。レストランの食事メニューも心配りされており、大変好評である。今回のクリスマスディナーも特別の気分を味わわせていただいた。（株）ブリヂストンより、「奥多摩園」という素晴らしい宿舎を、こんな良い時期に優</p>

		<p>先的に提供いただき、まさに物心両面からこの活動を支えていただいていることに感謝し、心して活動を続けたい。</p> <p>クリスマス音楽会には、声楽家の青木寛子さん、フルートの島田沙織さん、ファゴットの興津諒さんが出演され素晴らしい演奏を堪能することが出来た。社会人スタッフで音楽家さんを率いてピアニストとして参加された白井優次さんが司会を担当され、華やかで心温まる時間となった。</p> <p>音楽会の終わりには岩手県出身の（？）サンタクロースが登場し、いつものように（株）サンリオから提供頂くプレゼントを子どもたちに手渡ししてくださり、子どもたちはとてもうれしそうだった（学生スタッフにもプレゼントを頂いた）。最後に輪になって恒例の「翼をください」を歌い、みな、名残惜し気に部屋に戻った。</p> <p>閉会式では、仲間たちや、お世話になったプリチストンやサンリオの方々へ寄せ書きをした。高2になった女子が「私も卒業したら学生スタッフになって、夢のつばさの活動を手伝いたいけれど、私の下の年齢の子がもうあんまりいない」と心配していた。参加している中学生や小学生が寂しい想いをしないように、楽しい活動を続けていこうと社会人スタッフも気を引き締めている。</p> <p>送迎では、キャンプ中にインフルエンザを発症した子どもに看護師が付き添って保護者に送り届けるシフトを組んで切符を購入するなど、最後まで気の抜けない状況ではあったが、他には感染者もなく、無事クリスマスキャンプを終了できて安堵している。</p>
<p>春の交流会</p>	<p>2024.3.17 13時～16時 於：仙台市</p> <p>子ども6名、 学生・OGOBスタッフ11名、 社会人スタッフ2名 合計19名</p>	<p>仙台市中小企業活性化センターにて春の交流会を行った。中学卒業、高校卒業の節目を迎えた子どもたちら6名、学生・OGOBスタッフ11名、社会人スタッフ2名が参加した。</p> <p>今回が新しい学生代表たちの最初の行事となり、「初めて会う子どもと学生だけでなく、これまで何度も交流してきた参加者同士の間でも新鮮さを感じてほしい」「体を動かしてリラックスした状態、かつチームで同じ目標を目指して取り組むという場面を設けることで、自然と会話や笑いが生まれるようにしたい」と、綿密に企画を用意して行われた。自己紹介に「うそ」を盛り込んで、それをほかの人が相談して見抜くゲーム仕立てにしたり、チーム間の競争のあるゲームを行ったりして、コミュニケーションがたくさん取れるように工夫されており、皆がそれぞれ楽しめる活動となった。</p> <p>また、高校卒業を迎えた子ども2名から、それぞれ大学進学の記事があり、皆の祝福を受けた。医学部に合格した女子は「地域で、いろいろな人のどんな悩みにも対応できる総合的な医師を目指したい」と希望に胸を膨らませている様子であった。また中学卒業した2名がそれぞれ希望の高校へ進学した記事があり、学生スタッフから、それぞれお祝いの色紙が手渡された。</p> <p>今回の行事日程調整では、16日を希望する子ども6名と、17日</p>

		を希望する子ども6名に分かれてしまい、中学や高校卒業の子どもの多かった17日を選んだが、16日を希望する子どもたちの希望に添えず残念であった。
--	--	---

2. 奨学金について

2023年度、夢のつばさではそれぞれ大学や専門学校に進学している9名の子どもたちに奨学金を授与することができた。本年度新しく支援対象となったのは、東北にある私立大学とパティシエ養成の専門学校に進学した2名の男女である。夢のつばさの奨学金は、毎月1万円と少額ではあるが、特に学業用と用途を定めず、返済不要としている。学生生活の中で趣味や自己研鑽に自由に使えるように、また友人と遊びに出かける際や、何かの集まりで飲食費等が必要な時にも、ためらわずに参加できるように、という想いで用意している。

この夏のキャンプで、奨学金を受けている2名の男子が、それぞれ「奨学金は本当にうれしいです。お金が足りないなあと思う時、頼りになります。」「困ったなあという時、『あ、あれがあった、ほーっ』となるよね。」と口をそろえて嬉しそうに話していた。来年社会人になる大学4年生女子からは、就職が決まったという報告も受けた。『東京の大学で学ぶこと、しかも女子が』、というのは育った環境にはあまりいないとのことで、本人・保護者からも「夢のつばさで出会った大学生たちの様子に刺激されて頑張ってきた。」と聞いている。彼女は大学生活では、夢のつばさの学生ボランティア副代表も務めて、後輩たちの世話もしており、この活動に深いつながりを持ってきた。自身も支援者に支えられてきたことを胸に刻んでいる様子で、「これからも応援するので、イベントのあるごとに顔を出してね。」と声を掛けたら、嬉しそうに頷いていた。

また冬のキャンプでは、これまで支援してきて、自動車の整備士専門学校を卒業する男子から、「就職も決まって、車の購入を決心しました。」と報告があった。震災で亡くなられたお父様が残した工務店を引き継いでいく夢があり、希望にあふれた笑顔に、一同、胸を熱くして応援の言葉をかけた。

2024年度は、大学及び専門学校卒業により3名が奨学金終了、新たに大学入学2名、専門学校に入学した1名を加え、合計9名に授与される。

懸命に道を切り拓いていく若い人たちに、奨学金授与ができるのも、多くの個人ご寄付者・団体のご支援の賜物と、スタッフ一同、心より感謝申し上げている。

3. 総括

2024年1月1日に、能登半島で震度7の甚大な地震が発生し、大きな被害が明らかとなった。亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、ご家族を亡くされ方々や、被災された方々に心からお見舞いを申し上げます。この地震の様子を見聞きする度に、東日本大震災直後に、東北の地を訪ねて惨状に震えた記憶がフラッシュバックする。詳細な報道が待たれるが、保護者を亡くされた子どもさんたちがおられるのではないかと、必要な支援の手は届いているかと案じている。

夢のつばさプロジェクトが、2011年5月に開始して以来、孤児・遺児となった子どもさんへの支援活動はこの春で13年になった。活動に参加した子どもは、延べ600人に及ぶ（2012年に遠野と花

第1号議案：2023年度 事業報告（夢のつばさプロジェクト）

巻において、青年会議所と共催で開催した「被災地の子ども支援キャンプ」の200名余を除く）。30名前後の小中高生がほぼ固定的なメンバーとなって、年数回の宿泊行事や日帰りの交流活動に参加してきた。本年度の夏キャンプの詳細で紹介したように、高2女子が、「自分も卒業したら学生スタッフになって、夢のつばさの活動を手伝いたいけれど、年下の子が少ない」と気にしていたように、子どもたちが徐々に卒業するにつれて、対象人数は減少傾向にある。特にコロナ感染症蔓延以後、2019年度からは、東北3県に参加者募集をかけられず、現在は、十数名程度を対象とする活動となっている。

冬キャンプのおしゃべりタイムでは、「過去と未来、どちらに行ってみたい？」という話題で、話が弾んだ。高2男子が、「過去」を選び、「どうして？」の声に、「自分は小学校5年生から夢のつばさに参加したが、過去に戻って、夢のつばさプロジェクトの最初から参加したかった。」と話し、OBOGたちもほろりとしていた。いつもは言葉少なな男子だが、そろそろ自分が子どもとして参加する時間が短くなってきたことを感じ、「もっともっとこの場にいたい、この仲間と親しみたい」という思いが、こうした言葉になってあふれてきたのかと思うと、この「居場所づくり」の活動の意義はあった、という感慨とこれからをどうしていこうか、という思いを深くする。冬キャンプの後、保護者の方たちから次々にお礼の連絡が入り、そのやり取りから、キャンプの再開を子どもたちがとても喜んでいること、保護者の方々からも頼りにされていることがよく伝わってきた。関係者一同、現在参加している中学生や小学生が寂しい思いをしないように、今後もこの子たちの卒業の時まで貴重な活動を続け、さらに意義あるものにしていきたいと考えている。東北3県の教育委員会などへ新たな支援対象者の募集を行うことや、また、対象を広げて活動を持続するかなど検討していきたい。

本年度は、コロナ後、初めて予定した行事をすべて行うことができ、改めて、対面で濃密に接する本活動の良さを確認できた。学生スタッフがコロナ感染症蔓延による3年間の行事中止によって分断されて、ノウハウの継承に懸念があることやスタッフ数の減少傾向もあり、宿泊行事を2泊3日にしている。これまで行っていた社会見学などの行事は、日程的にも盛り込むことが難しい状況だが、徐々に企画・実施していきたいと願っている。